

数研 AGORA

▶「思考実験」とは何か
—新科目「公共」でどう扱えばよいか—
／児玉 聡……1

▶高等学校 新教育課程 カリキュラム
案〔専門(職業)学科・中高一貫教育校〕
……4

No.72

この用紙は、再生紙を使用しています。

「思考実験」とは何か —新科目「公共」でどう扱えばよいか—

京都大学准教授
児玉 聡

はじめに

2022年から始まる新科目「公共」の学習指導要領では、思考実験を用いた活動を通して、人間としての在り方生き方などを考察・表現することが明記されている。以下では、倫理学の分野で思考実験が果たしている役割を説明し、思考実験を行うことの意味について考察する。

1. ギュグスの指輪

なぜ人は嘘をついてはいけないのだろうか。この問いに対する一つの答えは、「嘘はいつかはばれてしまい、ばれると結局は自分が損をするから」というものだ。これは、通常その通りであろう。嘘をつき続けることは難しく、ほとんどの場合はばれてしまう。自分のためにならないから嘘をつくべきではない、と子どもに教えることは間違いではない。

では、絶対にばれないという保証があれば、嘘は許されると考えるべきだろうか。ここで、古代ギリシアの哲学者プラトンの『国家』に出てくる次の有名な話について考えてみよう。これは、「不正を行なうことは常に自己利益に反する」というソクラテスの立場に対して、対話相手のグラウコンがその反証例として出してくる物語である¹⁾。

ギュグスの指輪とは、羊飼いのギュグスがたまたま見つけた黄金の指輪のことだ。この指輪の玉受けの部分をはねると自分が見えなくなると知った彼は、自分が仕えていたリュディア王の妻を寝取ったうえに、妻と共謀して王を殺害し、王座に就く。

この話をしたあと、グラウコンは次のように論じている。「かりにこのような指輪が二つあったとして、その一つを正しい人が、他の一つを不正な人が、はめるとしてみましょう。それでもなお正義のうちにとどまって、あくまで他人のものに手をつけずに控えているほど、鋼鉄のように志操堅固な者など、ひとりもいまいと思われましょう。…正しい人のすることは、不正な人のすることと何ら異なるところがなく、両者とも同じ事柄へ赴くことでしょう」²⁾。

つまり、グラウコンの説明によると、結局のところ人々は「不正がばれたら困る」と考えてしぶしぶ道徳や法律に従っているのであり、もし不正がばれないのであれば誰でも不正を行う方が得策だと考えるだろうし、逆に不正がばれないとわかっている不正を行わない人がいれば、我々はそういう人を愚かな人間だと思うだろうということだ。

グラウコンが言うように、倫理は自分の利益になる限りで従うべきもので、自分の利益にならないければ従わないでよいのだろうか。これは、「なぜ道徳的になるべきか(Why Be Moral?)」の問題として知られているものである³⁾。

2. 思考実験とは

ギュグスの指輪のような架空の事例を用いて考えてみることを、思考実験(thought experiment)とよぶ。思考実験は、ちょうど研究室での実験のように、日常的には存在しないような理想的な状況を人工的に作り出すことで、倫理的問題に対する我々の

道徳的直観(直観的な道徳判断)を得ることを目的とする。ギュゲスの指輪の話であれば、グラウコンの思考実験は、「ばれなければ不正を行うことは本人の利益になる。だから自分の利益になる場合は不正を行ってもよいのだ」という考え方に説得力を与えているといえる。

今日の倫理学では、こうした思考実験が多く用いられる。たとえば、よく知られているものとして、ぬれ衣の事例がある。

ぬれ衣の事例

A民族とB民族の対立が強い地域で、A民族の子どもが暴行を受け、それによってB民族に対する反感が高まっている。このようななか、その地域の警察署長は次の二つの選択肢から選ばないといけない状況である。一つは、みなが疑わしいと感じているが警察署長は無実であることを知っているあるB民族の男性を暴行の容疑で逮捕すれば、A民族によるB民族への暴動とそれによる何名かの死を避けられるという選択肢。もう一つは、犯罪者を探すことにして、その結果、B民族に対する暴動が生じるがその被害をなるべく最小限にするという選択肢である。警察署長は暴動を避けるために嘘をつくべきかどうか迷っている⁽⁴⁾。

この思考実験は、「社会全体の利益を促進することが倫理的に唯一正しい目的である」という功利主義の考え方に対する反証例として出されたものである。この事例の原型を考案したマクロスキーは、功利主義者なら嘘をついて無実の者を有罪にすることを支持するだろうと主張し、功利主義は正義に反するとして批判している。

20世紀の英米の倫理学においては、こうした思考実験から得られた道徳的直観を手掛かりに、功利主義や義務論といった倫理理論の正しさが検討されてきたといえる。とりわけ有名な思考実験は、トロリー問題である。

トロリー問題

トロリー(路面電車)が暴走している。運転手が何もしなければ、線路の工事をしている5人の人々はひき殺される。もし運転手がレバーを切り替えて、トロリーを別の線路に引き入れれば、5人は助かる。ただし、別の線路で工事をしている1人がひき殺されることになる。運転手はレバーを切り替えるべきか。

この事例は、元々フィリッパ・フットが1960年代の論文のなかで挙げたものだが、近年マイケル・サンデルが論じてとくに有名になったものである。この事例では、多くの人は功利主義的な判断、すなわちレバーを切り替えるべきだという道徳的直観を持つと思われる。そうすると、ぬれ衣の事例では「多くの者を救うためであっても少数の者を犠牲にすることは許されない」という結論が支持されたが、トロリー問題では「多くの者を救うために少数の者を犠牲にすることが許されることがある」という結論が支持されることになる。どのようにすれば、この結論の違いを正当化することができるだろうか。

ここではこれ以上の議論に立ち入らないが、思考実験およびそこから得られる直観を用いて、このような形で倫理学の理論や原則を吟味するというのが20世紀の英米倫理学の一つの手法であった。

ただし、思考実験から得られる道徳的直観がどのぐらいの「重み」を持つかについては論争があるところである。たとえば、我々は直観と理論の間で整合性を取らないといけないという考え方がある。『正義論』で知られるジョン・ロールズは、これを「反省的均衡」とよんだ。この場合、直観は倫理理論を作るうえで一定の重みを持つことになる。一方で、我々の持つ道徳的直観は、社会的な常識や偏見を反映したものであるか、進化の過程で得られた単なるバイアスでしかないため、倫理理論を検討する際に大きな役割を果たさないとという立場もある(功利主義者のピーター・シンガーなど)。このように、倫理理論を吟味する際に直観が担う重要性については議論があるものの、思考実験は倫理学や他の哲学の諸分野(認識論、心の哲学など)において重要な位置を占めているといえる。

3. 思考実験に対する批判(1)

「ありえないのだから考えても無駄」

こうした思考実験については、そういう事例はありえないのだから考えても無駄だという批判がある。とくに、近年有名になった上述のトロリー問題について、そういう批判がなされることがある。思考実験に対するこうした批判は古くからあったようで、ローマ時代の哲学者のキケロはギュゲスの指輪の話の説明したあとに、次のように述べている。

悪意は少しもないが、あまり明敏の士でもない一部の哲学者達はプラトンのこの物語は架空な作り話だと広言している。あたかも、それが実際にあったことだとか、あるいは可能なことであると、彼が断言しているかのごとく。(中略)彼等はいう、「かかる仮定条件は不可能だ」と。勿論だ。しかし、私の質問は、彼等が不可能だと宣言していることが、もし可能ならば、一体、彼等は何をするだろうかということである。(中略)彼等は「もし可能ならば」という私の言葉の意味がわからないのである。何故かというに、もし彼等が発見されずにすれば、何をするだろうかと我々が尋ねるのは、彼等が発見されずにすむか、どうかを尋ねているのではなく、いわば彼等を拷問(試練)にかけているのであって、もし彼等が罰せられずにすむことが保証されれば、一番自分の利益になることをするだろうと返事をしたとすれば、それは彼等に罪を犯す気があることを告白することになるだろうし、又、もし彼等がそういう事をしないとせば、不道德な一切の事は、それ自体避くべきだということを認めることになるだろう⁵⁾。

このように思考実験は、「もし悪事が見つからなければ」のような仮の条件を導入することで、なぜ不道德なことをすべきでないのかについての我々の思考を深めるために用いられる。日常的には起こらない極端な状況を仮定して考えてみることで、我々が普段用いている考え方の特徴や限界が露になることがある。したがって、そのような事例はそもそも起こりえないというような批判は往々にして的外れといえる。アインシュタインも思考実験を好んだことで知られているが、「光と同じスピードで走ると、光線はどのように見えるか」という思考実験について、そんなことはできないから考えても無駄だと言うなら、相対性理論は発見できなかっただろう。

4. 思考実験に対する批判(2)

「思考実験によって二択を迫るのは非倫理的」

また、思考実験によって二択を迫るのは非倫理的だという批判もある。たしかに、講義中に教員がギュゲスの指輪の例を出して、生徒たちにどちらを選びますかと挙手させることは、各人の倫理観の核心の部分を開き出すことになり、本音を言いたくない生徒がいる場合は不適切かもしれない。また、トロリー問題のように架空の話とはいえ人の生死が関わるような問題を扱う場合には、慎重になるべきであ

ろう。しかし、そうした配慮は必要であるものの、各人がギュゲスの指輪の例で提示されたような思考実験や、トロリー問題のような思考実験を検討しなくてよいことにはならない。最後に英国で2000年に問題となった現実のケースを紹介しておこう。

結合性双生児のジョディとマリーのケース

ジョディとマリーは、2000年の8月初旬に生まれたい卵性双生児である。二人は生まれつき体が腰と尻のあたりで結合している。これは結合性双生児というめずらしい症例である(以前はシャム双生児とよばれており、日本では1980年代にベトちゃんドクちゃんというベトナム人の結合性双生児の事例がよく知られていた)。マリーの心臓と肺は機能しておらず、ジョディの心臓と肺が二人の血液を循環させている状態である。そのため、そのまま成長すればジョディの心臓に二人分の負担がかかって半年以内に二人とも死ぬ。しかし、仮に二人を分離する手術をすると、ジョディは生きられる可能性が高い。ただし、心臓などの臓器が十分に機能していないマリーは確実に死ぬ。つまり選択肢は、次のいずれかである。

- (1)手術をしてジョディを助ける。ただしジョディから切り離されたマリーは死ぬ。
- (2)手術をしない。その結果、ジョディもマリーも死ぬ。我々はいずれの選択肢を選ぶべきだろうか。

この事例では、人数設定は異なるがトロリー問題と似た問題構造がある。すなわち、分離手術をせずにそのままにすれば2人も死ぬが、分離手術を行えば1人は助かるが1人は死ぬという構造である。

このジョディとマリーの事例がそうであるように、人生はときに我々に困難な二択を迫ることがある。我々はそのときになって慌てぬよう、普段から準備をしておくべきである。思考実験は、上手く扱うなら、こうした人生の困難な選択を切り抜けるための練習問題として役に立つだろう。

- (1)プラトン『国家 上』(藤沢令夫訳)岩波文庫、p.108以降。
- (2)プラトン『国家 上』(藤沢令夫訳)岩波文庫、pp.109-110。
- (3)詳しくは、大庭健ほか編『なぜ悪いことをしてはいけないのか —Why be moral?』(ナカニシヤ出版、2000年)を参照。
- (4)この事例について、詳しくは兄玉聡『功利と直観』(勁草書房、2010年)p.153以降を参照。「シェリフの事例」を改変した。
- (5)キケロー『義務について』(角南一郎訳)現代思潮社、1974年、pp.164-165。